

スーパーキャッチャー城島健司

西松 宏

王選手へのあこがれ

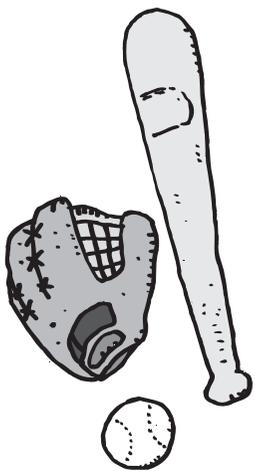
「すごいなあ、王選手は。」

五歳の健司がビデオをみている。

（どうして、あんなにボールを遠くへ飛ばせるんだろう。）

そんな思いで、王選手の打つホームランを見つめていた。

元巨人の王貞治選手は、現役二十二年間で十五度の本塁打王、二年連続三冠王などのタイトルをかくとくし、「一本足打法」で世界記録・八六八本のホームランを打った選手だ。



健司が四歳のとき、王選手は現役を引退したが、プロ野球好きの父は、しばしば王選手

のビデオや本などを借りてきては、健司にみせていた。

父は健司に、夢を持ってほしかった。それもちっぴけな夢ではなく、かぎりなく大きな夢や目標を。

「王さんは世界でいちばんホームランを打った人なんだよ。」と、父が言うと、健司も目をかがやかせながら、

「どのくらい？」と、たずねる。

「八六八本も打ったんだよ。」

「すごいなあ。」

「ホームランっていうのは一発で試合をひっくり返すだろう。逆に、打たれば一発でひっくり返される。それがホームランの魅力なんだ。」

ある日のこと、健司は父にたずねた。

「ぼくも、王さんみたいにホームランをたくさん打てるかなあ。」

「おまえならじょうずだし、きっとできるよ。」

「うん。」

「でも、こういう一流の選手になるためには、人の何倍も努力をして、訓練を積まないとなれないんだよ。」

「よしっ、ぼく、がんばるよ。プロ野球選手になる！」

「そうか、よし、じゃあキャッチボールはそのための訓練だ。父ちゃんの言うとおりについてこい。」

「わかった、王さんを追いこしてやるんだ。」

「世界の王」は、親子がともにいadakあこがれたった。

「ぼく、野球やめる」

城島選手は、これまでの野球人生のなかでたった一度だけ「野球をやめる」と、言ったことがある――。

一九八九年四月、佐世保市立相浦中学校へ進学すると、健司はすぐさま野球部に入部した。

「今日からお世話になります、城島健司です。ぼくはプロになりたいんです。よろしくお願いします。」

そうあいさつするの聞いて、野球部の左海道久監督はびっくりした。初対面であり「プロになりたい」と言う新入生など、初めてだったからだ。

当時、相浦中野球部は一九八六年に全国中学校軟式野球大会で優勝、八八年には九州大会でベスト4になるなど、強いチームとして知られていた。

部員は多いときで百人以上。入ってきたばかりの新入生の練習は、走りこみや球拾いばかり。もちろん打撃練習などはさせてもらえない。練習はきびしく、新入生の大半は夏ごろになるとやめていく。

左海監督は、かつてはプロを目指していた野球選手だった。監督は、健司の素質を見のがさなかった。健司はすぐに上級生のレギュラー選手にまじって、練習をするようになった。

ところがある日、健司は遊んでいて不注意から足をけがしてしまった。

(同級生のみんなが球拾いをしているなかで、自分だけは打撃練習もさせてもらっている。なのにぼくはけがをして、練習もできなくなってしまった。こんな無責任なことでは、とてもプロになんてなれない……。)

何日も練習を休まなければならず、思うようにならない日々が続いた。そして、健司は父に言った。

「父ちゃん、ぼく、野球やめる。」

「それは、自分で決めたことか。」

とだけ、父は健司にたずねた。

「そうだ。」

と、健司が返事をする、父はおこりもせず、だまっていた。約束をやぶられ、内心、かなりショックだった。

(自分でよくよく考えて決めたことならば、仕方ないか……。)
父は、そう思った。

翌日、健司は左海監督にも「やめます」と伝えた。監督は健司をはげました。

「だれだって思うようにいかないときや、やめたいと思うときはある。でも城島、おまえは決して一人じゃないんだぞ。おまえのことをいつも考えてくれるお父さんや、いろいろ身の回りの世話をしてくれるお母さん、少年野球クラブの監督やチームメイトなど、おまえの活躍を楽しみにして、応援してくれている人はいっぱいいるぞ。ここでやめてしまったら、みんな悲しむぞ。」

健司は左海監督がそう話すのを真剣に聞いていた。しばらくして、監督の目を見ながら、こう答えた。

「監督さん、またがんばります！」